

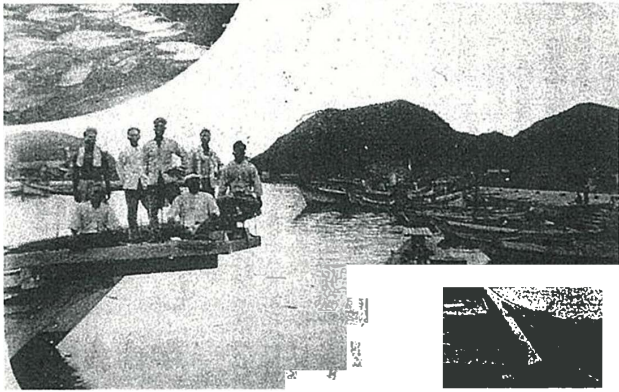
台湾が日本統治下にあった大正から昭和にかけて、本県の漁師ら約140人が東北部の港町・南方澳に移住した事実について、高知大学の吉尾寛名誉教授(67)＝東洋史＝が実態調査を進めている。一般にはほとんど知られておらず、詳細が分かれば、高知と台湾の新たな交流の芽になる可能性もあるが、史料が限られているのが実情。吉尾さんは、移住者の子孫らに情報提供を呼び掛けている。(宮内萌子)

本県漁民の台湾移住 情報を

高知大・吉尾名誉教授呼び掛け

戦前に140人 技術持ち込む

南方澳は沖に黒潮が流れ 1921年、産業拠点として好漁場で、台湾総督府は漁港整備に着手。23年に完成すると、高知や愛媛などから漁師に移住を呼び掛けた。39年に発刊された専門誌「台湾水産雑誌」によると、本県からは26年に12世帯65人が海を渡ったのを皮切りに、ピーク時の39年までに計24世帯139人が移住。このとき日本人移民は41世帯212人で、その7割近くを高知出身者が占めていた。本県出身者は、1本の軸縄に多数の枝縄をつける、と記され現在台湾三大



1930年代の台湾・南方澳漁港でカジキ漁に船に乗った日本人の漁業移民たち。当時は高知からの移民も多かった(吉尾寛さん提供)



戦前の漁業移民について研究する高知大名誉教授の吉尾寛さん



漁港の一つである南方澳の発展を後押しした格好となっている。ただ、植民地化による反日感情も台湾にあったときに結核込まれて軍港へ。写れる中、当時の南方澳での日本人移民の生活実態や、現地の人との交流、終戦で引き揚げた移住者の行き先や記録などはほとんど史料が残っておらず、黒潮流域の漁業交流を研究テーマにする吉尾さんが2008年ごろから調査を本格化。移住者の子孫を探し、聞き取りをしてきた。そんな中で出会った1人が同市朝倉己の青木市子さん(88)。祖父は同県幡豆郡白田川村(現黒潮町)の漁師だったが、1920年代に一家8人で南方澳に移住。青木さんは現地で生まれ、13歳まで過ごした。「おじいさんとお父さんが一緒に船に乗っていた。大きいカジキを取っていた」と振り返り、台湾人の友だちはおらんかったけどお手伝いさんが雇われ、身の回りの世話をしてもらった。「引き揚げの時は列車に詰め込まれて軍港へ。写真の一つも持ち帰れなかった」と話す。とはいえ青木さんを含め、話を聞いた子孫はまだ5人。多くは幼少期の記憶が中心のため「全体像がつかめず、分からないことばかり」という。南方澳のある宜蘭県政府は、港の着工から100周年に当たる来年6月、記念の水産シンポジウムを開催する予定。縁のある高知の研究者として吉尾さんも招かれる。調査結果を発表するところ。 「当時の記憶のある方が高齢化しており、調査は時間との闘いでもある。関係者は一報いただければ」と吉尾さん。調査の進展が「高知と台湾の新たな交流につながれば」と期待している。